

北極星の夜

北森 みお

何度も何度も僕はこのバスに乗っているのですが、少しは僕の顔くらいは覚えておいででしたら、うれしいのですけれど。

当然のことですけれども、運転手さんは運転中だいたい前を見ていなければなりません。

それに日に何人もの乗客が入れかわり立ちかわり降りたり、降りたり乗ったりしているのですから、いちいちひとりひとりの乗客の顔など、記憶に残るはずもないと思います。ですから、覚えておいででなくても、それはもう当然のことです。

ああ、すみません。乗るなり、べらべらと勝手なことを。運転のおじゃまでしよう。

どうぞ僕の独り言と聞き流してください。

僕は運転手さんの顔をよく存じていますよ。

あなたはこの路線専門の運転手さんなのでしょう。

僕が乗ると必ずあなたが運転しておいでです。

僕にとって運転手さんは、隣町に住む同い年のいとこよりも、もっともって顔を合わせている顔なじみなのです。これで何度目でしょう。僕はもう数え切れないくらい回数、あなたの運転するこのバスに乗りました。

バスが通る山道や町の中や、川のほとりや田んぼや畑のほとりの四季の風景を、もう目をつむっていてもバスが通る順々に、この古ぼけた帽子の中側の頭の中にある画用紙に、僕はささっと描くことができるくらいですよ。

でもきつと運転手さんは、僕なんかよりもっとうまく早くバスの外の風景を順々に描くことができるでしょう。

ああ、どうかそのままです。

前を見たままです。

もしお邪魔でなければもう少しお話しさせてください。

運転に差し支えるようであれば、すぐにやめますからね。

言ってください。

いえ、返事などされなくてもけっこうです。もう本当に